

川崎市立南生田小学校 学校だより 第2号

南いくた

令和6（2024）年4月26日（金）発行

【学校教育目標】

心豊かで自らよく学び
たくましく活躍できる子どもの育成

南生田小学校校長

羽深 東

大切な一人一人

新年度がスタートして3週間が過ぎました。子どもたちは少し緊張しながらも、新しい環境ではりきっている様子があちこちで見られます。教職員も同じです。この気持ちを継続していくことが大切だと思います。

5・6年生の委員会活動でも、学校のあちこちで目を輝かせて活動している様子が見られます。委員会が開かれるのは1か月に1回ですが、そこで決めたことを常時活動として、日々学校のために各々の持ち場で活動しています。ほとんどが朝の登校直後や休み時間が活動時間です。休み時間などは遊ぶ時間が削られてしまいます。遊べなくなることは、一見後ろ向きな気持ちになりそうなものです。しかし実際はそうでもないようです。その活動にやりがいを感じていると思われる姿があちこちで見ることができます。目には輝きが、聞こえる言葉は前向きで建設的な意見が。人はだれしも誰かの役に立ちたいという思いがどこかにあるのだと思います。集団の中で役割を果たすことから、自分の存在価値を感じるのかもしれない。

小学生は、どんなことが人の役に立つことなのかを覚え、体験し、やり遂げた時の充実した喜びを知る大切な時期です。学級の中での給食当番や配り係などの当番活動から始まり、高学年になるとその活動が学校全体に広がり、委員会活動へとつながります。

人間は他の動物に比べて空を飛べるわけでもなく、力が強いわけでもないのに、今の時代まで生き延びてこられました。それは火や武器を使ったり、協力して力を合わせたりしてきたことが大きいそうです。協力し合わなければ生き延びてこられなかった人間にとって、だれかの役に立つことに喜びを感じるのは、ごく自然なことなのかもしれません。

個人の思いを大切にするという時代の流れから、役割を担ってもらうことに遠慮する気持ちが芽生えることが増えたように感じます。私自身、子どもたちへの「これ、お願いします。」という一言を発することに、いつもブレーキがかかるようになりました。年々このブレーキを踏む力が強くなっています。けれどもその心とは裏腹に、いつも子どもたちはとても嬉しそうにお願いを受けてくれて、その笑顔に安心するのです。遠慮する考えが過剰になると、かえって相手に孤立感を抱かせ、自己有用感を低下させてしまう原因になるのではないかと感じるこの頃です。

南生田小学校では、誰かの役に立つことの喜びが様々な場面で感じられ、自分自身が貴重な存在であるとみんなが思える学校でありたいと思っています。

1年生を迎える会を4月24日に行いました。昨年度から計画委員や音楽委員、そして6年生の実行委員など、学校のあちこちではりきって準備をしてくれた子どもたちによってできた会です。体育館の広さのため全学年が入れず、各学年が入れ替わっての出会いでしたが、どの学年にも楽しそうな笑顔があふれ、お互いの心のつながりを感じました。大きい学校ですが、「一つになっている」と思える時間になりました。